佐世保の街角で三八年

宮野 由美子

原稿の依頼を受けた時、本当にオロオロしてしまった。私たちの活動は、ただただ継続している年月が長いというだけのことなのに、いかにも「やってますよ。」と報告していいものだろうか。「気楽に書いて下さい。」と言われて、つい乗ってしまった自分を悔やんでいるが、佐世保で続けている、ささやかな反戦運動の一端をご報告させていただこうと思う。

毎月十九日、午後六時が近づくと、市内の目抜き通りに面した松浦公園にどこからとなく人が集まってくる。その数二〇人あまり。いまやそのほとんどが常連で顔なじみの「十九日佐世保市民の会」のメンバーである。世話人が持ってきた横断幕を広げ、旗竿を組み立てて六本のノボリを作り、めいめいが持つ。手作りプラカードやゼッケンを作ってくる人もいて、プラカードを両手に持つ人もいる。「さあ、六時になったので出発しましょうか。」世話人から声がかかり、みんなは佐世保で一番にぎやかな目抜き通りへと歩き出す。

■きっかけはエンタープライズ

アメリカの原子力空母エンタープライズが佐世保港に入港したのは、一九六八年一月十九日早朝のことだった。佐世保の街はその数日前から騒然としていた。エンタープライズ入港に反対する大勢の反対派、とくに三派全学連が大挙してやってきたからである。三派全学連＝過激派のマスコミ報道は行き渡り、商店街はシャッターを下ろし、市民たちは息をひそめて事の成り行きを見守った。一月十七日平瀬橋、一月二十一日佐世保橋と米軍基地に通じる橋の上では、学生と機動隊の衝突が激しさを極め、けが人は続出し学生たちは次々と逮捕されていった。恐ろしいはずの全学連は正義感溢れる日本の若者だったし、全学連を打ちのめす機動隊もまた日本の若者だった。米兵たちはその激突の様子をガムを噛みながら見物していた。この光景は佐世保市民にやりきれない思いを抱かせた。ベトナム戦争は激化し、日本から弾薬が運ばれ、復帰前の沖縄からはB29爆撃機が飛び立った。そして――エンタープライズは北爆に参加した原子力空母だった。

エンプラ入港から一ヵ月後の一九六八年二月十九日、職業・性別も様々な人々が「エンプラには二度と来て欲しくない。」という思いで集まり、市内の商店街を歩く「十九日市民の会」が結成され、第一回のデモが行われた。参加者は一二〇人。時には三〇〇人を数えることもあったこの会も継続するうちにその様相を変えた。佐世保に米軍基地があるために原子力艦船が寄港するのだ。基地をなくすために日米安保条約に反対しなければならない。この思いの変遷は、参加者の減少をもたらしたが反面強固な結束力を生むことにもなった。

■垣根の低さが身上

デモはこの日以降、一度も休むことなく続けられ、この四月十九日で四五九回を数える。「平和のために」の横断幕を先頭に、「平和な街に基地も軍隊もいりません」「許すな！憲法改悪と戦争への道」と書かれた六本のノボリ、それに参加者手作りのプラカードにゼッケン。「自衛隊はイラクから撤退せよ」「九条実現」「教育基本法改悪反対」、内容はその時の状況によって変わる。参加したいとやってくる人は誰も拒まない。デモの参加者は誰もが会員である。原則的にはマイクもシュプレヒコールもない。デモをやりながらチラシを配る時もある。参加者の責任で作ってきたチラシならばすべてOKだ

び議会は、いっせいに「反対」の声を上げました。

そして、基地の西側に位置する行橋市の仲津校区では、区長たちで構成する基地対策協議会が「絶対反対。条件闘争にはしない」と明言して、十二月八日に一〇〇〇人を集めて住民総決起集会を開催しました。私がこの地に住むようになって三〇年以上経つけれど、こんな集会は初めてです。驚き、そして感動しました。池田さんという基地対策協議会会長の強いリーダーシップによるものです。

その池田さんに会うたびに私は叱られます。「築城は何をしているのだ！」

残念ながら、私には築城で住民決起集会を呼びかける立場も力もありません。でも、池田さんたちを孤立させてはいけない、何か私にできることはないか、と悩みました。で、私が副会長をしている「築城町男女共同参画会議」で署名活動をしようと提案、役員会・組織代表者会の承諾を得て、今年二月、一ヵ月間かけて署名を集めました。

会長以下、役員たちも「米軍が来るのは絶対いやだ！」と強い意思を見せ、順調に署名は集まるかに思えました。しかし、参画会議加盟組織の中で最大の組織力を持つ小中学校のＰＴＡが協力を拒否。商工会女性部も反発。いずれも「自衛隊との関係を悪化させる行動はできない」との理由です。「米軍来るな！」も言えないほど、自衛隊と濃密な関係をさまざまに結んでいる基地の町の現実が改めて浮き彫りになったのでした。

署名活動の背後に渡辺ひろ子の強い影響を嗅ぎとったことが、いっそう拒否反応を顕著にしたようです。「渡辺は基地反対を言うが、この町は基地と共存共栄だ」と言うのです。

■米海兵隊が来る？

それでも、これが築城での米軍移転反対運動の口火になればと念じつつ、目標の半分の二五五〇筆の署名を三月初め福岡防衛施設局に提出しました。その後、議会や自治会長会でも、「住民集会を！」という話が出たが、結局誰も旗を振る人がいないまま、日は過ぎていきました。

四月十八日の『日本経済新聞』で、築城と新田原の両基地に米海兵隊が来るという話が出て、突然の展開に茫然。中間報告の中にあった「緊急時の滑走路使用」の正体がこれだったのか！

築城基地の中に新たな駐機場・格納庫・隊舎などを建設するというから、いずれ常駐化に近い形になると思われます。『日経』の記事が出ると、防衛施設局は再三、自治体へ出向いて、やっきに否定して回っていて、五月二日に出た最終報告の中でも、「海兵隊」の文字はどこにもないけれども、普天間の基地機能の一部移転とは、まさに海兵隊の一部移転です。

五月二日、二〇四回目の反基地座り込みは、そのまま最終報告抗議の集会となり、四〇名を超える参加者とマスコミとで、基地前はなかなかのにぎわいでした。午後、残ってくれた二〇名ほどで、地域へ一七〇〇枚のビラ入れ。

さてさて、これからどうするのか。何ができるのか。岩国のような流れを作れないまま、「渡辺さん、がんばってね」と言って、自分は決して動かない地元住民の腰を上げさせる妙案はないものか、と重い気分の私の頭上、五月晴れの空に自衛隊のＦ15が爆音を立てて旋回しています。

（わたなべ・ひろこ、平和といのちをみつめる会代表・福岡県築上町）

し、内容に賛同する者はチラシ配りを手伝う。ある意味いい加減ともいえるこの垣根の低さが「十九日佐世保市民の会」の身上である。アメリカがイラク攻撃を始めた後の十九日や米兵犯罪が起こった後の十九日には参加人数が増える。つまり、この会は抗議の声を上げたいがどうすればいいか分からない人たちの受け皿になるのである。

この他に、毎月九日にはデモのメンバーも参加して「反核座り込み」を行なっている。被爆二世の若い教師を中心に「核実験に抗議する佐世保市民の会」が結成され、市内中心部の島瀬公園で座り込みを始めたのが八九年七月九日だから、こちらも二〇〇回を越え一七年目に入った。〇三年十二月九日は小泉内閣によって自衛隊のイラク派兵が閣議決定された日だが、その日から佐世保地区労の参加があり、毎七〇人程で座り込みが続いている。

「核兵器廃絶、あらゆる核実験に反対しましょう」と書かれた横断幕を広げ、マイクで反核・反戦・反基地・反安保を訴えている。また、九六年に起こった米兵による強盗殺人未遂事件を契機に、「基地犯罪を許さない女性の会」が結成されたが、十九日市民の会の女性メンバーも参加している。沖縄を思えば「米軍基地がある」と言うにはおこがましいほどの基地の街だが、こんな街でも米兵による犯罪は頻発していて、今年に入ってからも窃盗事件、ひき逃げ事件、引ったくり事件と女性を標的にした事件が相次ぎ、その度に、抗議集会やデモ、市長と基地司令官への抗議の申し入れ、街頭でのビラ配りなどを行なっている。米兵が起訴され裁判が始まると傍聴へも出かけて行く。こんなところが、三九年目を迎えた佐世保の市民運動の現状だけれど、今年九〇歳になられるS先生、私財を投じて平和祈念館を建設・運営される八〇歳のHさんご夫妻をはじめ長老方が「死ぬまで続ける！」と意気軒昂なので、五八歳の私も若手？として、この街から戦争につながるものが消えるまで、一緒に歩いて行きたいと思っている。

築城にのしかかる米軍再編

渡辺 ひろ子

「築城基地で日米共同訓練計画」の発表を機に反基地運動を始めて二〇年になります。一九八九年四月二日に「築城基地へのF15戦闘機配備反対・基地包囲人間の鎖」を旧社会党系の労組などと共にやり、「反基地運動の継続化を！」と、その年の六月二日より、毎月二日を反基地行動日として航空自衛隊築城（ついき）基地正門前に座り込みを続けて一七年が経過しました。この間、いろいろありました。我々もいろいろやったけど、国家の側も本当にいろいろやってくれて、遂にわが町の基地からイラクへ派兵される事態にさえなって、それを阻止する力量もなく、悔しさを噛み締めながら座るだけの弱き者たちです。

大きな組織の運動と我々の住民運動との意識や運動形態のズレは次第に縫合できないほどの亀裂を生じ、基地前に残った地元住民はほんの数人ですが、各地で様々な市民運動を続けている人たちが毎月二日には築城までやって来てくれて、常時二〇～三〇人で頑張ってきました。

■「米軍再編」に立ち上がる住民

そして、現実を変える力もないまま、我々はまた新たな激流に襲われています。在日米軍再編問題です。昨年秋に出された中間報告で、「嘉手納などの米軍F15戦闘機訓練の一部移転と緊急時の滑走路使用」という形で、築城基地と新田原（にゅうたばる）基地（宮崎県）の名が挙がりました。これを受けて、築城基地周辺の関係自治体の首長及